カタカナ語の長母音

―日本語学習者による発音特徴―

上　村　恵　子

関西学院大学大学院
言語コミュニケーション文化研究科
博士課程前期課程修了

1. 日本語の構造とカタカナ語

日本語の音の数え方には、音節または、拍、モーラを数える２通りの方法があります。例えば、「あんな」「切手」「遠い」の場合は、真ん中の「ん」、小さい「っ」、それから「お」というのばす音を、前の音と一緒に数えるのが音節の数え方です。「あんな」「切手」「遠い」は２音節になります。拍ですと、「あんな」「切手」「遠い」の「ん」ですとか、小さい「っ」、のばす音も全部表記どおりに数えるので３拍になります。

日本語の音節構造は、開音節、オープンシラブルとなっております。これは、全部ではないですが、大方、母音で終わる構造です。CV 構造ともいわれますが、C はコンソネント（consonant）、子音のことです。V はヴァウル（vowel）で母音のことです。オープンシラブル、開音節、CV 構造などと言います。これと対照的なのが英語です。英語の場合は閉音節、クローズドシラブルといわれております。英語は、大体、母音で終わりません。例えば、dog や cat というのは閉音節で終わります。

拍の中に先ほど出てきました、「ん」、小さい「っ」、それからのばす音は特殊拍と呼ばれております。長音に関しましては、カタカナの場合、長音符号「ー」を用いて表現することになっております。研究対象であります長母音というのは、母音と長音をあわせたもの、例えば「アー」ですね、「ア」と長音「ー」で「アー」、「イ」と長音「ー」で「イー」などです。

今現在、外来語の氾濫や、カタカナ語の氾濫という言葉がよく用いられているように、カタカナ語はどんどん増えてきております。日本語の中には漢語ですとか和語、もともとあった言葉、それと、外から来た言葉、外来語があります。外来語の中でもカタカナで表記したものをここでは「カタカナ語」と表現しようと思います。カタカナ表記の外来語の多くは英語が原語です。先ほど申し上げました中国経由で入った漢語などは、室町以前のものを指すことが多いようです。古くからある外来語といたしましては、ポルトガル語から来ている「たばこ」ですとか「パン」などが定着しております。外来語は明治期に増加し、その頃にカタカナで書く習慣が確立されたといいます。大正、昭和期にさらに外来語が増加し、そして現在、外来語の氾濫といった表現が

用いられるようになりました。先ほど、ここでのカタカナ語とは、外来語の中のカタカナ表記のものといいましたが、そのほかにもアルファベット表記でカタカナ読みしているものも多くあるんですね。例えば、外国語そのものを使った映画、雑誌のタイトル、自動車や会社名などはアルファベットで表記されながらもカタカナ読みされ、日本語の音韻体系で発音されているものがあります。 日本語母語話者でしたら、英語の「bag」を見れば、「バッグ」のことだとすぐわかりますが、不思議なことに日本語学習者の場合は、そのような推測があまりできません。過去の研究では、「instant coffee」、これをカタカナで表記しなさいといった課題を、オーストラリアの日本語学習者対象に実施した分析があります。そこで彼らが書き記したのは、「インスタントコヒ」と最後の長音が書かれていなかったり、「インスタッントコーヒー」と促音、小さい「ッ」が入ってしまったり、「エンスタント」と語頭の「イ」を書き記すことができなかったり、多様な表記が見られたという結果があります。

次に、日本語母語話者は「bag」というつづりを見て「バッグ」と読むことができます。これがどういったシステムかを見ていきます。まず、「g」は閉音節で終わっておりますので、日本語のシステムにあわせるために開音化して「u」を最後に入れる。次に「g」の前に促音、小さい「ッ」を挿入します。日本語の母音は、英語の発音よりも少ないので集約されてしまうんですね。例えば、「エ」という発音でも、ちょっとこもった「ア」でも、全部「ア」になってしまいます。そういうことで母音の日本語化、「ba」は「バ」になるわけです。また、例えば「fa」ですとか「ti」のような日本語にないような音の場合には、子音を日本語化します。今回の場合、「bag」の「b」も「g」も日本語にある音なので、特に変化はありません。そして、アクセントの日本語化により「バッグ」と頭上りのアクセントがつきます。そこでカタカナ表記になるのが、「バッグ」ですね。今現在は「バッグ」と発音する方も増えておりますが、日本語的には促音の後続子音の無声化という、変化があります。例えば「bag」の場合の後続子音は「g」ですね。「g」グは発音したときに声帯が震えるので有声音です。それを無声化することで「g」は「k」に変わり、カタカナ表記にすると「バック」という表記になります。日本語母語話者には大したことはないですが、このような変化が起こっていることを覚えていただきたいと思います。それから、英単語中の例えばar、er、orはア列の長母音「アー」になります。

2. 日本国内の留学生

国内の日本語学習者の多くは外国人留学生でもあるわけですが、今現在、留学生の総数は13万8,075人です。これは日本学生支援機構の調査結果（2012年5月1日）で明らかになっているものですが、6割以上中国からの留学生が占めておりまして、韓国、台湾、ベトナム、マレーシアと続いております。アジア圏の留学生が多いことがおわかりいただけると思いますが、留学目的といたしましては、大学を卒業したり大学院を修了したり、もしくは修学です。それから、異文化体験に短期に留学されている方、語学習得のために短期留学されている方も中には含んでおり

ます。

どの学校に外国人留学生が所属しているかという在学段階別留学生数は、大学院生4万人弱、大学生は大学・短大・高専を含みまして7万1,244名となっております。このように半数が大学・短大・高専に所属しており、大学院生は30%と出ておりますが、比較的大学院に進学している留学生が多いことがわかります。

「留学生30万人計画」が平成20年7月に策定されました。これは、グローバル戦略の一環として、2020年をめどに目指す計画です。30万人ですので、今が13万8,075名ですから、現在の2倍以上の留学生を受け入れたいと考えているようです。そのためには、大学なり社会が、受け入れ態勢を考えて、入試や就職のあり方を検討する必要があると考えられます。

3. 研究目的

日本語学習者を対象としまして、私自身はカタカナ語の中の長音に興味を持ちました。その長音の先行研究を調べたところ、実験に協力された方々の母語というのは英語、韓国語、中国語、そして日本語母語話者を比較したものが多くありました。長音を対象としながら長音の位置を分析したもの、Voice Onset Time（VOT）の位置を分析したもの、短い母音、短母音を分析した研究はありましたが、外来語における長音の分析を目的とした研究はその時点ではありませんでした。その結果、カタカナ語における長音の位置と発音の難易度を考察するため、実験語における構成要素の持続時間を比較し、言語別の発音特徴を明らかにすることを研究の目的としました。実験語における構成要素には、子音や母音、1つの単語に無音区間もあります。そういった構成要素の長さを比較して、母語の発音特徴、母語干渉を明らかにすることを目的としました。

4. 実験語

実験語ですが、語彙知識の影響を受けないことから、無意味語を選びました。無意味語というのは作成した言葉ですから、余り意味がないと思いがちですが、そうではありません。例えば、「よいスタートを切った」には、スタートというカタカナ語が含まれています。この言葉になれている日本語学習者の方だったら問題なく言えますが、なれていない場合はスムーズに言うことが

Table 1　実験語とそのモーラ数と音節数

	実験語	音声表記	モーラ数	音節数
1	タタター	／tatataR／	4	3
2	タータタ	／taRtata／	4	3
3	タタータ	／tataRta／	4	3
4	タータータ	／taRtaRta／	5	3
5	タータター	／taRtataR／	5	3
6	タターター	／tataRtaR／	5	3

できないのです。馴染みのある単語の場合は、長音によって発音が難しいのかどうかわからないですから、そういったことを踏まえて、実験語を作成することにしました。

実験語の子音には／ｔ／を選びました。これは無声子音ですが、VOT によって声の立ち上がり部分を計測しやすいためです。また有声音で計測しやすいといったこともあり、母音には／ａ／を選びました。長音の位置、つまり長音符号の位置を移動し、このような実験語にしました。

1つ目が「タタター」、2つ目が「タータタ」、3番目が「タータタ」、4番目が「タータータ」、5番目が「タータター」、6番目が「タターター」ですね。ここでは「R」を長音表記に使いました。モーラは先ほども言いましたように拍のことですが、4拍、5拍という数え方ですね。すべて3音節のこのような実験語を作成しました。

5. 実験協力者

実験協力者ですが、日本語母語話者11名、中国語母語話者7名、英語母語話者6名、韓国語母語話者6名、トータルで30名です。ここでおもしろかったのは、発音の実験と聞くと、皆さんどうも嫌がるんですね。日本語母語話者が英語の発音に自信ないのと同じように、日本語学習者の方も皆さん発音には自信がないのかなという印象を受けました。

中国語母語話者の方にお願いしたときに、非常にネットワーク力が強いというのを感じました。というのは、お一人に誰かを紹介してくださいとお願いしますと、何人もすぐ連絡して呼んでくれました。ですが、韓国人の場合は、少しプライバシーを尊重するのか、そういった行動は見られませんでした。英語母語話者ですね、英語話者の方の実験協力者を集めるのに苦労しました。というのは、やはり文化の差でしょうか、約束が難しく、また約束をしてもなかなか時間に来ないことがありました。

実験方法ですが、個別に音声を録音しまして、WAV 形式という形式を使って保存しました。「これは……と発音します。」このような文章をキャリアセンテンスといいますが、その中に実験語を一つ一つ入れながら、1つの実験語につき各3回ずつ発音していただきました。発話速度、話すスピードは各自が自然だと思う発話速度で話していただきました。収集した音声のデータ数は540です。実験語が6、被験者数が30で、繰り返し3回です。

6. 分析方法

分析には、フリーの音響分析ソフトである Praat を使用しました。アムステルダム大学の研究者の方が開発したフリーソフトウェアで、誰でも使えるようになっております。こちらをコンピューターのほうにインストールしまして、それを使いますと、このような波形が出てくるんですね。北村（2000）と李（2003）の分析方法と同じ手法を使いました。

「タタター」という言葉ですが、／ta／のあと無音区間があって／ta／、で無音区間があって／taR／ですね。無音区間が2カ所あります。無音区間のことを Closure Duration（CD）とい

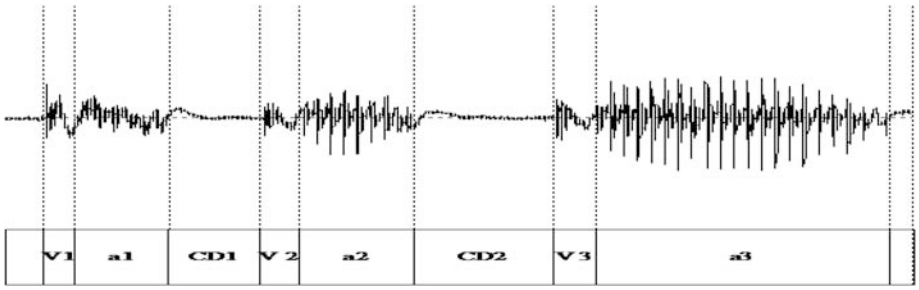

Figure 1　／tatataR／の分節

備考）V1 は VOT1、V2 は VOT2、V3 は VOT3 のことである。ここでは第 1 母音を a1、後続の CD を CD1、第 2 母音を a2、a2 後続の CD を CD2、第 3 母音を a3 とした。上村（2012）より引用。

います。波形になっていないところが無音区間になります。先ほど言いました声の立ち上がり、Voice Onset Time（VOT）ですが、1 つ目を VOT1、2 つ目を VOT2、3 つ目を VOT3 としました。母音も 1 つ目の母音を a1、2 つ目の母音を a2、3 つ目の母音を a3 とし、この波形を見ながら、音声を聞きながら分節しました。こちらの Praat というソフトウエアで、分節しそれぞれの区間を計測できます。得られた数値をエクセルに入力いたしまして、平均値、最小値、最大値を求め、必要に応じて SPSS 社の統計ソフトを活用して、統計的にその差があると言えるかどうか分析しました。

7. 実験結果とその分析

母音から見ていきたいと思います。日本語母語話者による母音の発音ですが、こちらの分析の手順は、まず実験語を分類いたしました。短母音が 2 つ含まれるグループと、長母音が 2 つ含まれるグループ、2 つに分けました。それから、その中で先行母音と後続母音、始めの母音と後ろの母音の長さを比較しました。短母音なら短母音同士どちらが長いか。長母音なら長母音同士どちらが長いかという比較です。最後に統計的に差があるかどうかを知るために、Wilcoxon の符号付順位検定を行いました。

まず、この 2 つに分けましたが、例えば「タタター」の場合は、始めの母音、2 番目の母音、3 番目の母音、この順で長くなります。もちろん最後 3 番目の母音というのは長母音なので、長母音が一番長くなります。これは、2 番目の短母音、始めの短母音よりも 2 番目の短母音のほうが長い。これは頻度が高かったんですね。ですので、頻度が高いものをパターン A としました。「タータタ」この場合は 2 番目の母音と 3 番目の母音でしたら、3 番目の母音のほうが長かったんですね。発話の頻度が高かった方パターンのほうを A と名付け、反対のことを言っているパターンのほうを B としました。この頻度を見ていただければ、どちらが主流なのかというのはおわかりいただけると思います。

そうしますと、パターン A で頻度が高いほうからわかったことは、短母音を 2 つ含む場合は、

後ろの短母音を長く発音していることです。長母音を２つ含む場合は前の長母音が長いことがわかりました。これを Wilcoxon の符号付順位検定の結果を出しましたところ、差があるという結果が出ましたので、先行母音と後続母音の長さの代表値には有意な差がある。つまり、単語中の母音は、その位置によって長さが異なることが明らかになりました。

次に、日本語学習者による母音の発音の特徴にいきます。日本語学習者による母音の発音は、短母音と長母音を区別して発音しているかどうかが気がかりでした。そのため、母音が不正確に発音されている発音の回数を調査いたしました。日本語学習者の総発話回数は 342 回で、日本語母語話者が発音している母音の長さの最小値と最大値の範囲で発音されていないものを不正確に発音されているエラーとしました。このエラー回数は 25 回で、総発話回数の 7.3%、1 割にも及ばなかったわけです。ですが、この内訳を見ますと、韓国語母語話者のエラー率が最も高く、続いて英語母語話者の方が続きます。最後は中国語母語話者でした。韓国語母語話者のエラー率は半数以上でした。

韓国語母語話者の方は、正規の留学生がほとんどでしたのと、あとは在日韓国人で社会人入学している方にもお願いしましたので、日本語のレベルはかなり高かったです。英語母語話者の方たちは短期留学生がほとんどでしたから、日本語のレベルというのはそれほど高くはないんですね。ですが、韓国語母語話者のエラーが多かったため、日本語学習者のレベルとの関係はないと解釈いたしました。そこで、韓国語母語話者の発音傾向ですね、どういったところでエラーが出ているのか、チェックしましたところ、語末の「タ」、短い「タ」を長く、長音のように発音する傾向があることがわかりました。

次ですね、音の立ち上がり、Voice Onset Time（VOT）といいますが、この場合は／ｔ／を選びましたので、子音の長さと言いかえてもいいと思います。言語別の VOT の平均値ですね、その音の立ち上がり部分、子音の長さの部分ですね、全て計測した数値から平均値を出したのですが、英語母語話者の VOT が長いこと、日本語母語話者の VOT がかなり短いことが平均値のグラフから読み取れます。グラフからわかったとしても、統計上有意な差があるかどうかが、数値を扱うときにとても大切になります。したがって、Kruscal-Wallis の H 検定による比較を行いました。その結果有意な差が見られ、言語によって VOT の中央値に有意な差があることが明らかになりました。

VOT は、1 つの実験語の中に 3 カ所あります。はじめの「タ」の VOT1、2 番目の「タ」の VOT2、3 番目の「タ」の VOT3 です。こちらがこれらの平均値をグラフ化したものです。

先ほどの結果と同じですが、どの位置に関しても、英語母語話者の VOT が長かったです。日本語母語話者の VOT が短いという値が出ました。VOT1 が、VOT2 と VOT3 と比較して長いことがわかります。

VOT の代表値を Friedman 検定により比較しました。そこで、どの言語でも VOT の位置によって、VOT の中央値に差があるという結果が出ました。つまり、VOT は母語の言語にかかわら

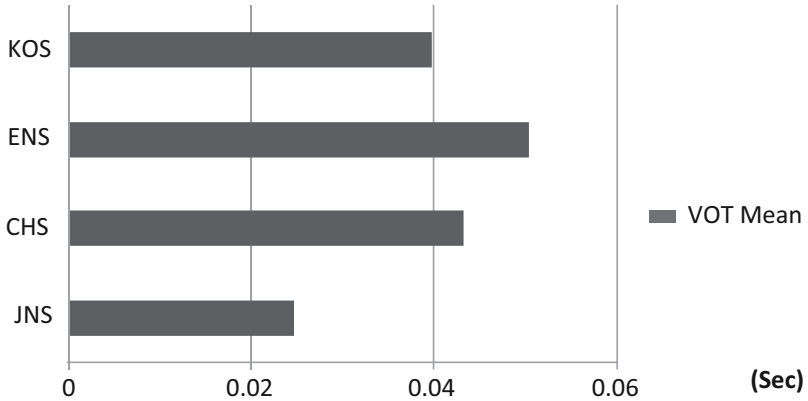

Figure 2　言語別 VOT の平均値

備考）CHS は中国語母語話者、ENS は英語母語話者、JNS は日本語母語話者、KOS は韓国語母語話者を表す。

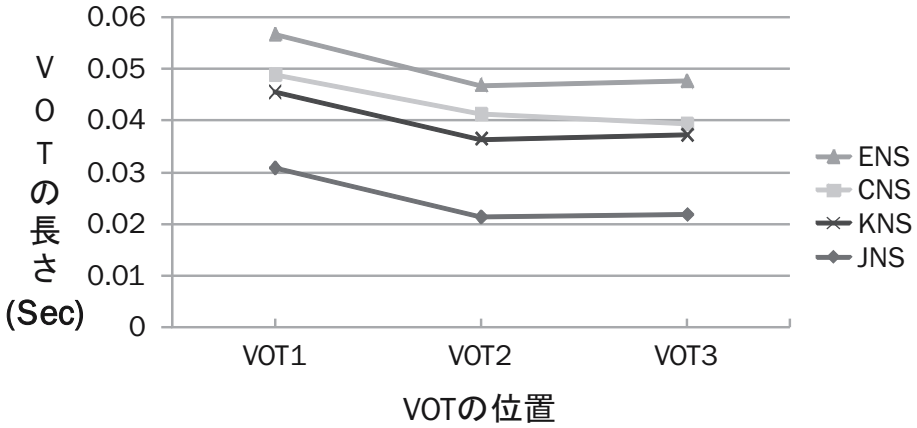

Figure 3　位置における VOT の平均値

備考）CNS は中国語母語話者、ENS は英語母語話者、JNS は日本語母語話者、KNS は韓国語母語話者を表す。

ず、位置によって長さに差の生じることが明らかになりました。

先ほど単語の中には無音区間があると申し上げましたが、Closure Duration（CD）という無音区間の分析方法の手順をまず見ていただきたいと思います。

まず、日本語学習者による CD、実験語の中の無音区間は、2 カ所あるわけですが、その長さが日本語母語話者による CD の長さの範囲、最小値、最大値の間に当てはまらない場合エラーとして数えました。次に、各実験語の位置、1 つ目、2 つ目ごとにエラー回数を集計し、母語別に各実験語における総発話回数とエラー回数からエラー率を算出して、日本語学習者の母語ごとにグラフ化いたしました。資料にはありませんが、中国語母語話者による CD のエラー率があります。

パーセンテージは出ておりますが、「タータタ」の場合は最後のCDのエラー率が高い。「タータター」これは1つ目の無音区間のエラー率が高い、このようなことがわかります。次に、英語母語話者によるCDのエラー率ですが、「タタータ」ここでは1カ所目の無音区間、「タータタ」これでは2カ所目のCDのエラーが多い。「タタター」の場合ですと1カ所目のCDのエラー率が高いことがわかりました。韓国語母語話者によるCDのエラー率では、「タータタ」を発音するときの2番目のCDの2番目のエラー率が高くなっております。

日本語学習者の発音傾向ですが、無音区間が長くなり促音的に聞こえます。促音というのは、小さい「ッ」で表記はしますが、次の音を発音するための構えなので音は出てないんですね。ですので、無音区間が長くなると、どうしても日本語母語話者には促音が入るように聞こえます。

中国語母語話者は「タータター」を「タッタター」、「タータータ」を「タータッター」、「タータタ」を「タタッタ」、それから英語母語話者は「タータタ」を「タッタッター」、「タタータ」を「タッタータ」、「タータタ」を「タタッタ」、「タタター」を「タッタター」、韓国語母語話者は「タータタ」を「タッタター」、「タータタ」を「タータッタ」、「タタター」を「タッタター」のように発音する傾向があることがCDの分析によってわかりました。

これらの結果からわかることを、母音から順に振りかえってみたいと思います。日本語母語話者による母音の発音は、短母音が2つ含まれる場合であっても、前の母音と後ろの母音の長さが違うこと、長母音が2つ含まれる場合は長母音の長さが違うことが明らかになりました。このような読みタスクにおいて、日本語学習者はおおむね長短の区別を習得していること、そして、韓国語母語話者は、語末を長音化して発音をする傾向があるということ、音の立ち上がり部分、VOT、ここでは子音の長さともいえますが、日本語学習者のVOTは日本語母語話者よりも長く、中でも英語母語話者のものが一番長いこと、特に語頭のVOTが長いことがわかりました。それから、CD、エラー率の高い実験語と位置は、母語によって異なること、長音を含むと発音の難易度が高まり、CDの長さに影響することが明らかになりました。これらの結果より、日本語学習者にとって長母音を含む3音節の連続音の発音は難しいと解釈できます。

8. おわりに

まとめですが、日本語母語話者と日本語学習者の発音は、こういった細かいところから違うことが実験より明らかになりました。長音にある単語の発音は日本語学習者にとって難しく、子音発音時に母語干渉が顕著になってあらわれるのです。日本語学習者の方は、長音があるカタカナ語の発音になれることと、日本語母語話者は、日本語学習者にとって長音や促音の習得が難しいことを考慮しながらコミュニケーションを図ることが大切ではないかと考えました。

最後にですが、言語研究の分析方法は多種多様です。音声の実験と分析を通して、私たちが耳にして違和感を覚えるノンネイティブの発音特徴が、いかに細かいところにまであらわれるかを確認することができたわけです。また、留学生とのかかわりを通して文化の差のおもしろさを再

確認することができました。カタカナ語は留学生と同様に外国から来たものですので、特に英語圏の日本語学習者にとってわかりやすいと思いがちですが、カタカナ語の形成を見ていただいたように、日本語独自の特殊拍が多く取り入れられるため、実際には日本語学習者にとって難しいことがわかります。

以上で、本日の発表を終わらせていただきます。本日は「カタカナ語の長母音、学習者による発音の特徴」というテーマにおつき合いいただいてありがとうございました。

主要参考文献

上村恵子（2012）「長音を含む2音節カタカナ語の生成 ── 日本語母語話者と日本語学習者の発音比較 ── 」『言語コミュニケーション文化』Vol. 10　No. 1　関西学院大学大学院　言語コミュニケーション文化学会　pp.3-18

小熊利江（2006）「自然発話に見られる日本語学習者の長音と短音の習得過程」『Sophia linguistica』54　上智大学　pp.193-205

北村よう（2000）「日本語の長音と促音の難しさ」『留学生教育センター紀要』20　東海大学　pp.27-44

国立国語研究所（1990）『日本語教育指導参考書　16　外来語の形成とその教育』大蔵省印刷局

賈　海平・森　大毅・粕谷　英樹（2006）「話速の変化に対する日本語の促音・長音の時間構造の分析に基づく日本語学習者の習熟度評価 ── 中国語母語話者を例として ── 」『日本音響学会誌』62巻6号　pp.433-442

（独）日本学生支援機構『平成23年度外国人留学生在籍状況調査について』（独）日本学生支援機構ホームページ

文化庁（1998）『言葉に関する問答集 ── 外来語編(2)』大蔵省印刷局

李敬淑（2003）「調音速度の変化と韓国語母語話者（中級日本語学習者）による日本語の長音生成」『信学技報』22　電子情報通信学会　pp.37-42

○**中川**　ありがとうございました。どうもお疲れさまでした。

ちょっと、私どもで2つ質問させていただいてよろしゅうございますか。

長音についてお話しになりましたが、促音とかあるいははねる、つまり、「ん」ですね、撥音というんですか、これについてはやっぱり同じようなご研究をされているんでしょうか。

○**上村**　私はまだこの長音だけです。

○**中川**　今、とりあえず長音について。

○**上村**　はい。

○**中川**　なるほど、なるほど。カタカナ語という……。

○**上村**　長音を研究対象にしたことで、その促音を挿入してしまうような、その無音区間を長く

する、そういう日本語学習者の発音傾向が見られたので、長音と促音というのは、そう切り離すことはできないのかと。

○**中川**　何となくくっついて、くっついて出てくるわけですね。

○**上村**　そうですね。日本語母語話者には考えられないことですが。ですから、日本語学習者にとって、長音があることによって促音が何となく入ってしまったりですとか、その区別というのは大変難しいものだと感じました。

○**中川**　カタカナ語というのは外来の西洋語だけなのか、それから日本語に多いオノマトペというやつですね、ピチャピチャとかチャピチャピとか、バンバンとか。

○**上村**　本来でしたら、そういったものも含めるべきだと思います。カタカナで表現したものはカタカナ語として言っていいと思うんですが、私の研究対象が、まずは外来語が増えている、増加しているけれども、日本語学習者にとってやっぱり習得しにくいというとこから入っていますので、この研究の中では一応外来語の中でカタカナ表記のものをカタカナ語というふうに表現させていただいたんですね。

○**中川**　もしかしたら、外国の日本語学習者にとっては、カタカナ語は外来語よりもオノマトペのほうが難しいかもしれないと。

○**上村**　そうですね。ですから、やっぱり日本語学習者を研究対象としてオノマトペを研究されている方も多い、いらっしゃるんですが、そういった中でオノマトペは習得しにくいといわれているんですが、オノマトペとカタカナ語をリンクして研究されているというのは、私の知っている範囲ではないですね。

○**中川**　すると、先生のように、まず長音からアプローチしていかれる研究者とか、促音から入ってこられる方と、いろいろもう……。

○**上村**　もういろいろですね。

○**中川**　つまり、この分野というのは、相当学問的な進化が深めることが進んでいる。

○**上村**　いろんな見方があると思います。

○**中川**　わかりました。どうぞ。

○**会場**　ありがとうございます。私、音声学全然専門じゃないのでという、いろいろ教えていただきたいところもありますが。

　エラーの基準で、ネイティブスピーカーの最小値と最大値の間というふうにおっしゃっていたんですけど、クロージュアデュレーションとか、母音と、それは何か相対的に決まるんでしょうか、決まった値があるんですか。

○**上村**　いや、決まった値はないです。ただ、私が収集したデータの中で、最小値と最大値を全部エクセルに入力しましたので、その範囲で考えました。というのは、音声の研究は難しいのですが、発音したものを計測するか、または音響的な分析で、聞き取った人がそう感じるか、また別の問題なんですね。ただ、聞き取ってどう感じたかの研究はここでは含んでないので、私が集

めた日本語母語話者の方の母音の長さの中で、最小値と最大値という幅を求めて、その中と同じように発音されているかどうかというところで比較しました。

○会場　じゃ、日本語母語話者が例えば、「タータタータ」と発音したものをたくさん資料を集めて、その長さを。

○上村　そうです。

○会場　だから、それ、多分最大値と最小値を、これを日本語母語話者が聞けば、別の音に聞き取ってしまう可能性が高いということですか。

○会場　日本語母語話者が聞いた場合に、促音じゃないのに促音と聞こえるとか。

○上村　そうですね、そのクロージュアデュレーションに関しましては、日本語母語話者がその単語を１つ発音している間に、クロージュアデュレーション、実験では２カ所あったわけですが、それが日本語母語話者のその最小値、最大値よりも超えて長く無音区間があった場合には、その促音が挿入して聞こえてしまう可能性は高いですね。

○中川　あと、それぞれの発音の特徴というのは、当然、韓国語ネイティブスピーカーなら韓国語の特徴がそのまま出てくるというふうに、先ほどご指摘になった韓国の方は、末尾の母音が長くなるというのは、僕らでも知っているけども、「ヨボセヨー」とかですね、「カムサハムニダー」、これでございますか。これをそのまま外国語発音するときにも出てしまうと。

○上村　はい。ただ、日本語に関してはやはり短母音と長母音、意味上の区別がある語もありますから、そういった区別といいますか、ない言語が多いですが、韓国語母語話者に関しては何かしら語末が伸びるといった結果が出たので、ふだんの会話の特徴がそこに出てしまっている可能性は否定できないと思います。

○中川　そういう特徴というのは、韓国の方なら韓国の方に日本語を教えることにとって、非常に重大な障害になるんでしょうか。

○上村　重大とは言えないと思いますね。ですが、日本語を指導する立場の者が、そういった特徴を心得ているということが大事だと思います。

○中川　なるほど。

○上村　それで、彼らにも語末が長くなってしまう傾向があることを伝えることによって、もしかしたら、その長音化というのを抑制する、可能性は高いんじゃないかと考えられます。

○会場　実はですね、私はモスクワ大学でロシア語やったんですけれども、モスクワ大学は日本人、インド人、イタリア人、ドイツ人、それから北欧、全部それぞれが先生がやったように、発音の特徴、日本人はこの発音、それから文法もですね、発音とは違うんですけど、それぞれの母語ですね、日本語を母語にしている、やっぱり物すごい特徴があるんですね。それがいわゆる標準的なロシア語をしゃべるのでは壁になるんですね。それをどう乗り越えさせるかというのが、それぞれ日本人に教える学習とインド人に教える学習とって、徹底的にやっていましたね。それで、ロシア語を普通のロシア語を教えるという。そういうふうに日本語を学びに来た人には、こ

れはインドから来た方だから、こういう壁が、これとこれとこれがある。それを乗り越えるにはどういうふうに指導したらいいかというところまで、もう既にいっているんですか。

○上村　いってないと思います。

○会場　　ああ、そうですか。

○上村　ただ、日本語、留学生に関しましては、中国人の方が多いということも先ほど申し上げましたが、ですので、何かしら方法というのはあると思いますが、特に中国語母語話者向けにというのは、日本国内では、今、ダイレクトメソッドという形で、ほかの言語を使わずに、日本語で日本語を指導するという方法がとられていますから、発音に関しては、その母語をどう修正するかというところまではまだ行っていないと思います。私の知っている限りですが。

○会場　実はですね、どうしても日本人がロシア語のこの言葉が発音できないというのがあるんですよ。そうするとどうやるかというと、口の中に手を突っ込んできますよね。もうそれで何度も何度もやる。それで直るかというと直るんですよ。ここのところ、この舌のここのところをぐっと押さえて、さあ言えとこういう言うんですよね。そうすると、その先生は、日本人の特徴というんですか、日本語をやってきた者の特徴、結果と言ってもいいんでしょうか、それを完璧につかんでいるもんですから、それを具体的にどういう方法をやったら、これが抜けるのかという物すごい研究をしているんですね。研究というより実践をやっているんですね。だから、やがてはそういう方向に行くのかなと思うんですけども、まだそういう段階は行っていない。これは発音だけじゃなくて、文法も、日本人はここで引っかかると。ここのところをこう解いてやったらという、スルスルスルと解ける方法ですね、を持っているんですね。だから、何ていうんですかね、やっぱり言葉を広げていこうというのは国策でもありました。今は違いますけども、当時私が受けているころは社会主義時代なもんですから、国策でもって相当力を入れていたんですね。だから、今、きょう、そういう意味で日本がどこまで日本語を教える場合に、具体的な方法まで発音なら発音で、つながっていっているのかなというのはちょっと興味があるもんですから。

○中川　どんなことでも疑問に感じること。

○会場　中国語が余りよくわからないんですけど、韓国語母語話者、韓国語の母語が、韓国語が子音が３種類あって、平音というのと濃音というのと激音という、息が普通のと、それから息が詰まって出るような音なもので、息が激しく出るのが激音なんですが、日本語にそのまま当てはまらないので、日本語の有声子音か無声子音で。母音に挟まれた無声子音が韓国語では有声になる。そういう傾向があるために、例えば「タタータ」と、その２つ目の「タ」を濁らないように意識すると濃音化する、詰まった音になるというのをどっかで読んだことがあるんですけど。その本人は「タータタ」と言っているつもりなんですが、２つ目の「ター」の後の「タ」を「ダ」にならないように「タ」と読もうとすると「ッタ」というふうに詰まる音になると濃音。日本人の耳にはそれが小さい「ツ」が入っているように聞こえるというふうに、ちょっと聞いたことがあります。だから、そういうちょっと違う要因なんですかね。

○**上村**　そうですね、そういった内容を私も先行研究で読んだことがあります、濃音とか激音。ただ、私自身が韓国語に余り詳しくないもので、そのような見方をしなかったんですが、そういった解釈もあると思います。韓国語の、韓国人の方の日本語の長音を対象にした研究では、やはり濃音や激音を考慮した分析方法をされていました。

○**会場**　これ、有声子音だとやりにくいですか。例えば、「ガーガーガー」とかいうのと。

○**上村**　どうでしょうね。やってみないと何ともいえないんですが。その Praat の使い方というのを全く初めてで、この分析をしたものですから、やはり計測のしやすい子音を選ばざるを得なかった、というところもあるんですね。また、有声音になると違った傾向は出るとは思いますが。どうなんでしょうね。母音の長さというのはそれほど変わりないと思いますし、ただ、有声音にすることによって、先ほどおっしゃられたような促音というのが、もっと顕著にあらわれる可能性はあるかなというところですね。

○**会場**　逆に、そこがあらわれないかもしれない。

○**上村**　かもしれないですかね。

○**会場**　有声子音なんでね、初めから。

○**会場**　それとですね、私は日本語を母語にしますよね。私は東北なんですよ、東北弁なんですよ、本来。そうすると、関西弁と東北弁と、それから名古屋弁というのがよくいわれます。そういうふうに方言がありますよね。同じ日本語母語とくくられないで、方言によってもかなり違いますか。だって、関西弁のしゃべり方と福島の私の東北になると、かなり違いますのでね。「どこへ行くんですか」と言うのと、「どさ、よさ」とこういう青森なんかそうですね。「どこへ行くんですか」「どさ」、「お湯に行きますよ、よさ」というのと、のんびりと関西弁とは全然違いますよね。そういう何か、同じ日本語の母語ですが、方言によって何かこう違いが出てくるかというような、そういう研究もあるんですか。

○**上村**　方言の研究でアクセントの違いなどを研究をされている方は、アクセントの場所が違うことや、文章の流れでイントネーションが違うこと、そういったことはありますが、長さに影響するというのは……。

○**会場**　今、先生がおっしゃった「どさ」の後に「ツ」があるように聞こえますよね。

○**上村**　そうですね。

○**会場**　何かやっぱり、母音では長めになってるというふうにいわれていますよね。

○**会場**　実はですね、僕は日本語もだめだし、ロシア語やったけどロシア語だめなんで、向こうのモスクワ大学の教員が励ますためだったんでしょうけれども、日本人の中でロシア語により近い、そしてロシア語を早く理解し発音もと言うたら、日本語の場合は東北弁をしゃべるやつが有利だと、こう言って。これ意図的に励ましたんだとは思いますが、そういうふうなのがあるのかないのかですね。日本で関西から来たんだという、僕は基本的に日本はおまえはどこだと言うから、私は東北だと。そしたら、東北弁はロシア語をやる人にとっては、東北弁やってきたという

のが有利だと、こういうふうに本当かうそかわからないですけど、何かつながりがあるのかなと。

○上村　私も聞いたことがあったのは、やはり東北出身の方だと、たしか鼻音をよく使いますか。

○会場　鼻音ですか。

○上村　鼻に。

○会場　はい、鼻にかかるやつ。

○上村　それか、鼻音、関東の人もかけることはできますが、関西の方って使いますかね。

○中川　鼻音ですか。そうですね、鼻音は西と東で余り差がないように思うんですが。「ん」「んが」ですね。「が」じゃなしに「んが」ですね。

○会場　余り関西はうるさく言わないですよね。

○上村　そうですよね。

○中川　やっぱり差がありますかね、東と西で。

○上村　ふだんの言葉の中で発音の範囲が広いということは、やはりほかの言語を学ぶというところにちょっと優位になるという可能性はあると思います。

○会場　なるほどですね。

○会場　結果的にちゃんと分析した結果かどうかはわからないです。東北弁がフランス語に聞こえるとか、「ジュルジュレ」と「ずるずる」とか、何か一見よく似ているとか、そういうふうにいう人がいます。

○会場　そうすると、僕はフランス語しゃべっているように思っているんですけどね。

○中川　それとは別にちょっと素朴な質問ですが、母音というふうにおっしゃいますが、またこれ子音というのはいろんな言葉余り変わらないと思うんですが、もちろん変わった子音もございますが、母音と一言におっしゃいますが、母音の発音って千差万別でございますよね。

○上村　そうですね。

○中川　これをどうやって、この中に、つまり、「ア」という、まさに「イ」ですよね。英語には「イ」という発音がほとんど使われることがないと思うんですが、日本でいう「イ」のね。逆に日本というのは「エ」と言うけど、ヨーロッパの人は「エ」というふうに非常に口を広げる。母音と一言に言うけど、中身が随分違うんじゃないかなと思うのは、昔ね、東北のうんと山奥に行ったこともあるんですが、なるほど上代８母音というね、金田一さんなんかが言っているんですが、上代は母音は今のようにアイウエオの５音でなくてね、８音だというふうに言って、それらしい発音が東北の山の中では話されているなという感じが、それがまさにフランスでいう「ウ」ですね。

○会場　今の「上代特殊仮名遣い」という。

○中川　上代８母音ですね。８つ母音が。

○会場　実際のことはわかってない。実際の音はわかってない。

○中川　もちろんわかってない。万葉語の中に入っているから、これが多分別の音だろうなといわれているんだけど。新妻さん気づかれませんでした。新妻さんのような都市部の東北でなしに、

もっと山奥に入って、マタギの人がいるような世界に行ったことがあるんですけどね。昔からの、例えば山菜の発音ですね、「アカンムイ」とか「ドッホイ」なんとかですね、非常に日本語の発音では普通ない母音の。それから、「フッ」って発音も出てくるね、「ドッホイ」。だから、これもしかしたら万葉語なのか、今でも残っているのかなという感じを持ったものですから。話がずれて申しわけありませんね。

○会場　今、松本清張の小説で、これ推理小説なんですが、これが東北と島根とが同じ言葉が。この人、東北だと思って追っかけていったら島根出身だという、そういうのがありますよね。だから、今言ったように、僕も都会じゃなくて山奥なんですけども。言葉ってやっぱりそういうのがあるのかな。

○中川　出雲の言葉っていうのは、恐らく渡来系だと思うんですよね。それでよくいわれるように秋田とかああいうとこは渡来系の人が多いというふうによくいわれますね、向こう。逆に、岩手のほうは昔の新妻さん、つまり、縄文系の、失礼しました。とうとう出てきました。

○会場　東北でいうんですよ、縄文系か弥生系か。

○中川　渡来系かね。

○会場　ケンちゃんは、ナカガワさんは弥生系、貴族系なんですよ。僕は縄文系の農民のほう。

○中川　話が随分。

○会場　そういうふうな何かあるんですよ、それは。

○中川　だから、東北にある出雲の言葉というのは、もしかしたら渡来系の人たちの言葉なのかもしれないと、今ちょっと思ったんですけどね。

○会場　そうですね。

○中川　すみません、突然妙な話になって。

○会場　話戻して。

母音の学習者による母音の発音特徴、エラー率ですが、中国語母語話者、英語母語話者、韓国語母語話者という順番で、韓国語母語話者が日本語のレベルが高いにもかかわらず、エラーが一番多かったという結果がおもしろいなと思ったんですけど。そうすると、中国人よりも韓国人のほうが長母音を認識したりするのが困難な場合が多いということが推測できるんですか。

○上村　中国、韓国人ほうが。

○会場　中国人のほうが、中国人が一番エラーが少なかったですよね。

○上村　少なかったです、はい。

○会場　母音の長さの間違いが。

○上村　はい。

○会場　韓国人が一番多かったので。

○上村　これでもですね、本当、エラーの回数が本当に少なくて、全部の発話回数の中の7.3%。

○会場　ああ、そうか。

○**上村**　その中での割合ですから、読みタスクではほとんど長母音を短母音として読むというようなことは、ほとんどなかったんですね、余りなかったんです。でも、細かく見ていくと、韓国語母語話者がどうもエラーが高いということで、それは語末の「タ」を長く発音してしまう。読みタスクですから、頑張って読もうというふうな意識は働きますから、テスト、実験では、長音があれば長母音と意識し、長く発音することはできるのかなと実験をしながら感じました。

○**会場**　カタカナのほうの発音ではないんですが、カタカナのそのものについてちょっとお聞きしたいんですが。きのうだったか、おとといのNHKを見ていましたらね、NHKのアナウンサーが、お子たちが、どっかで生けすから魚をつかんでる、とっている、そういうのがあったんですよ。そのときにNHKのアナウンサーなのか記者なのかわからんけど、「ゲットしました」こう聞いたんですよね。僕は日本語の動詞、動詞をカタカナ語の「ゲット」なんて使うのは絶対に、今、日本語の文章表現講座というのをやっていますけど、絶対やめろと。こういう汚い言葉を使うなと、こういう、それだけ言っているんですけど、どう思われますか。NKHがやったもんですから、おいおいどうした。

○**上村**　そうですね。NHK的に「ゲットする」というのは、余りよろしくないかなと。

○**中川**　日本放送協会といわれてるんですね、NHKじゃなくて。

○**上村**　思いますが、一般的には「スタートする」とか「ストップ」は、もうカタカナ語ではありますが、「する」という動詞とつなげて、もう何ていうんでしょう、普通に使われるようになってしまっているんですね。若い世代の中で。

○**会場**　これ、まだ岩波の広辞苑には入ってないんですよね、「ゲットする」というのは。

○**上村**　そうですね。そういったことも日本語学習者の方はカタカナ語になじみつつ、そういう使い方も覚えていかなきゃいけないというところですが。公共で、しかもニュースで話す言い方ではないのかなと不思議と思ってしまいますね、その「ゲットする」というのは。でも「スタートする」ならどうでしょう。「スタートする」はどうでしょうか。

○**会場**　「スタート」は、今、大体定着してですね。

○**上村**　もう定着していますか。

○**会場**　でも「ゲットした」と、こういうふうな……。

○**上村**　そのなんか境がおもしろいなと、今、思ってしまいました。あのお話聞いて。

○**中川**　どのぐらいの期間なじむと、日本でも新妻先生のような方から許されるのか、それはわからん。ちょっと「スタート」だって考えて「ゲット」と全く一緒。

○**上村**　「ゲット」という響きのせいなのかなという気もするんですね。「ゲ」という、何かその音のせいで、ちょっと品がなく聞こえてしまうのかなという。

○**中川**　「スタート」は多分、日本でいうと戦前からもう使われていたように思うんですね。「ゲット」というのは、やっぱり最近、1990年ぐらいから使われ出したように、僕は聞き……。

○**会場**　そう思いますね。

○**中川**　だから、新しさと古さの関係は当然あるように思いますけどね、違和感があるかないかということは。

○**上村**　もしかしたら、ニュースで使われるそういったカタカナ語と、一般的な私たちが会話で使うカタカナ語というものの違いというのを、また比較するとおもしろいと思います。

○**会場**　そうですね。やっぱり定着していませんよ。だけど、NHK は使ってくれるな。

○**中川**　それ、クローズアップ現代じゃないですか。

○**会場**　いや違うんですよ。

○**中川**　ニュース番組。

○**会場**　ニュース番組で、子供があれですよ、魚とっていたんですよ。そして、それに質問したんです。

○**中川**　あっ、インタビュアーね。

○**会場**　インタビュアーが。

○**中川**　多分ね、僕思うんですけど、NHK の場合はニュースの台本ではかなり厳重な言語監修が朝日新聞と同じように行われていて、これは使っちゃいけないという規則があるので、多分ね、一般のアナウンサーはニュースの中で「ゲットしました」とは多分言わないと思いますね。インタビューだから。

○**会場**　なるほど。インタビューです。

○**中川**　インタビューだから会話ということでね。そこは相当許容度が広がっているんじゃないかと。

○**会場**　しかもね、活字で出したんですよ。もう声だけじゃなくて、「ゲットしましたか」と、何か黄色か何かつけて。余計、僕は頭に来てね。

○**中川**　もうそういう放送局には金払わないと言う。

○**会場**　もうやっぱり、ナカガワさんのテレビしか見ませんよ、僕は。

○**中川**　ああ、そんな。

○**会場**　どうでしたか、きょう、ご参加いただいたので、もし何か、何でもいいです。

○**会場**　初めて聞くことばっかだったんで、理解はしているとこなんで、あんま質問とかまでは。

○**中川**　一般的な発音のこととかで、いろいろ何でもいいですよ。きょうの話は確かに非常に専門的で、僕も一生懸命、今、理解しようとしているんですが。何か……。

○**会場**　私からちょっといいですか。その間、ちょっと。

　先ほど、特殊拍のことがありましたけども、一般にその特殊拍の撥音であるとか促音であるとか長音であるとか、獲得の順序というのは何かやっぱりあるんでしょうかね。学習者にとって、この特殊拍から獲得がなされやすいとかですね。以前、広島大学の迫田久美子先生がお書きになった「中間言語の研究」という本を読んだことがあって、その獲得の順序について、ちらっと触れていたような気もするんですけれども。きょうは長音の分析なんですけどね。その辺、何かど

んなもんでしょうかね。それから……。

○上村　そうですね。ちょっとその獲得順序までは、そうですね、私、知識がなく、　先生に聞いたほうが。

○会場　私も知らないです。

○会場　あとね、先ほどレベル別に、レベルは余り関係ないというお話があったかと思うんですけどもね。例えば、韓国語母語話者の中でも居住期間とか、あるいはそのレベルが違ったら、そのエラーが減るとかね。英語母語話者が短期間で来られた人だったと。そこで、こうこうこうだから、レベルは関係ないというご報告だったかと思うんですけれども、同一言語話者の中で観察したときに、居住期間だとか、あるいはそのレベルとの関連で見ると、エラーの率って減ってくるんじゃないかなというふうにちょっと思ったんですけどね。どんなもんでしょう。

○上村　そうですね。居住の年数、そこの内訳まで比較しませんでしたが、実験、音声収集する実験をしたときに、在日韓国人でずっと日本に住まわれて子育てもしてきた方に実験に協力していただきましたが、その方、流暢に日本語をお話になって、もちろん関西在住期間が長いので、関西弁も、上手な方ですね。その方ですら、やはりカタカナ語を読み上げるときに、詰まってしまったんですね。だから、カタカナになれているかどうかという、むしろその日本語のレベル全体といっても、いろいろな見方があると思うんですね。例えば、音読が上手な方ももちろんいらっしゃると思いますし、日常会話が上手な方、ライティングはたけている方、いろいろあると思います。そのレベルをどう区分するかというのも難しいというのもあるんですが、一番ニュースなどにも親しんでいそうなそういう方が、このぐらいの読みタスクでもかなり戸惑っていたということで。もしかしたら、カタカナ語を集中して勉強した場合には、そういうことはクリアできるかもしれないし、それはちょっと何とも言えないんですけど。

○会場　おもしろいですね。

最後に、マスコミの先生がお二人、きょう来ていらっしゃって、最近、日本人の表記、「コンピューター」なんかもね、「コンピューター」って長音化する場合もあれば、「コンピュータ」で表記なさる方もいるし、昔だったら「コーヒー」や「コーヒ」って表記したりね、ちょっと時代が違いますが。新聞などで結構スタンダライズ、標準化する役割を担っていますよね。

○中川　そういう場合はね、末尾を伸ばしますね。

○会場　「コーヒー」とか「コンピューター」とか。伸ばしますか。

○中川　のばすのが一般的な。

○会場　かなり影響を与えますよね、一般的に。

○中川　新聞の用語が社会を律するもんじゃないけど、やっぱり毎日毎日出ているもんですからね。

○会場　やっぱりカタカナ外来語でも、専門外来語というテクニカルな用語がありますね。あるいは、普通、カタカナって括弧してちょっと訳語を置いて、世間一般に幅広く普及したと判断さ

れたときに括弧をとるというふうな、そういう新聞の編集はやっぱりあるんですかね、編集上のルールっていいますか。

○中川　それは日本語らしきものを書いた上で、例えば電子計算機と書いて、（コンピューター）とするとか、そういうようなことをおっしゃっているわけですか。

○会場　今の例でもいいのかな。例えば、一般の人に理解されていない用語がありますね。例えば、きょうのお話で言えば、ホネティックス、音声学という言葉で。

○中川　シラブルとかね、シラブルでも。

○会場　ホネティックスというのをカタカナで書いて（音声学）というものみたいなね。一般に国民に幅広く理解されたと判断されたときに括弧の中をとると思うんですけど。その辺の判断というのは、新聞の編集の上で……。

○中川　一般には、新聞は新妻先生のような方が多い。一応、漢語を主体という一つの原則があるようなんです。それをわかりやすいようにカタカナ語に置きかえることは許されると。それで、やっぱり主体は漢語にしているはずです。それで、例えば音声学、ホネティックと書いたときに、あとそれやると文章の中では筆者がかなり自由な許容度でホネティックという言葉を使ってもいいよという暗黙の何かがありますね。

○会場　そういうもんなんですね。

○中川　やっぱり原点は漢語であるという一つの何かがあることは……。

○新妻　カタカナ語はもう使わない。基本的には使わない。

○中川　ただ、コンピューターの世界はですね、もうとにかく英語をカタカナにしたものが。これは私ちょっと知っているフランスでもそうでしてね。フランスという国は、ご存じのとおり、アカデミーフランセズという役所がございまして、そこは英語を使っちゃいけないという鉄則ですね。英語で入ってくるものは全て、そこがフランス語にして。

○会場　コンピューターとホネティックスは違う次元のもの。

○中川　そうですね。そういうふうにしちゃっているんですね。だけど、コンピューターに関しては、もうあんまりそれが多いんで、最近フランスでも、もうコンピューターの用語、ネット用語はもうそのまま使い出しているんですね、英語。ということは、もうコンピューターというのは、本当にもうあっという間に、英語を世界化している１つのツールになってしまった。

○会場　日本での表記の揺れに関しては、じゃ、深刻ではないと思うんですよね。「コーヒ」と言っても「コーヒー」でもいいと思いますけれども。

○上村　そうですね。私もちょっと表記の揺れに関して興味があって調べましたが、やはりその「コンピューター」と言ったり「コンピュータ」と最後の長音を省略したりというのは、工業系ですね。工業系では基本的に語末の長音はカットするという表記の仕方が決まっているんですね。

○中川　それはどこで決まっているんですか。そういう機関でそういう決まりをつくったの。

○上村　そうですね。ですから……。

○会場　学習者は迷いません、学習者は。日本語学習者は。日本語教育で……。

○上村　どうなんでしょう。そうですね。その専門的な、例えば、工業系のテキストですとか、工業系の論文もそうですが、語末の長音はカットする。カットしても恐らく意味が通るということだと思います。はい。そういった規定があることを知りました。

○会場　復元率、復元の可能性というのが少しね。

○中川　先ほど先生がおっしゃった「er」「or」、これはもう、要するにそのまま長くしないということですね。

○上村　そうですね、はい。その表記の場合はですね。

○中川　例えば、「ティーチャー」、「ティーチャー」とは言わないか。「ティーチャー」は「ティーチャー」なんですか。

○上村　「ティーチャー」はコンピューター用語では余り出てこないと思います。

○中川　言わないか。余り日本では言いませんね、確かに。

○会場　ある領域では、語末をカットすると。また別の領域ではのばすということで。

○中川　デザイナーですか。

○上村　「デザイナー」、「デザイナ」かもしれないですね。

○中川　「デザイナ」ですか。

○上村　いや、ちょっと「デザイナー」は調べたことがないんですけど。

○中川　しかし、それもやっぱり定着してしまっているものは、そのまま使っているかも、自分もわかりませんが、先生のおっしゃっていることを勝手に僕も。

○会場　学習者の混乱、その業界では最後の語末をね、終わり。別の領域ではのばすという。

○上村　今、工業系のほうに進まれる留学生も増えているので、そういったところで、どう使用されているかまではわからないんですが。恐らくテキストのほうには、その語末の長音を省略してあったり。しかし、日常会話的には長音化して発音するという、説明がなされていれば理解は恐らくしていると思うんですけどね。

○新妻　長音じゃなくて、もう一つは人の名前ありますね。それをのばすのか伸ばさないのかというのが。たしかロシア語なんかの場合、ソルゼニーチェンという、ソルゼニーチェンって、あれはそのまま読むとそれでニーチェンってこうなるんですけど、ソルゼニーチェンって伸ばさないで表記してしまうという、両方成り立っているんですけど。最後のあれであって、名前なんかはどうしたらいいのかということを含めると、カタカナ表記っていうのは相当……。

○上村　そうですね。国の名前に関しては、もともとのその国の言葉、言語の発音を優先的に、カタカナ語として表記もしているはずですが、若干やっぱりそういったところでも、例えばですね、「パキスタン」でも「パキスターン」でしょうかね、本当は。

○中川　「タリバーン」か「タリバン」かでね、いろいろ２つこれはもう完全に。

○上村　そうですね、そういったところでも、ただやっぱりそれはどうでしょう。いち早く伝達

したというか、取り入れた方の表記が優先になるのかどうか、誰かが決めているのかというのはちょっとわからないんですが、いや、私はその辺おもしろいなと思ったんですね。

○会場　専門家、例えば中東関係の専門家、新聞社の人に尋ねるとかする。その上で表記するんですか。

○中川　それでもね、今言った「タリバーン」、「タリバーン」とのばすのが一般的なようだけど、本の中では「タリバン」という本でタイトルがあるし、雑誌なんかでは「タリバン」という表記をしているところもあって、これも完全に混在ですね。これはもう一人有名な、割と有名なアメリカの歴史学者の「チャールズ・オーバービー」と我々言っているんですけどね、これが「オーバービー」と書くんだけど、本によっては「オバービー」と書くものと「オーバビー」と書くものがあって、この３つ、書物で偏在してるんで。インターネットの検索だと、どれ引いても出てくるんだけど、厳密にやっていると、例えば朝日新聞のデータバンクなんかだと３つそれぞれやらないとね、３つ全部やって初めてチャールズ・オバービーの記事が、「オバービー」なのか「オーバービー」なのか「オバビー」なのか、そういう現状もございます。

○新妻　私はサウジアラビアに、サウジはメッカ、メッカって言うでしょう、私たちは。でもメッカでないんだと。だからカタカナ語で言えば「マッカ」ですね。だから、僕ら、何とかのメッカ、あそこの場所はじゃなくて「メッカ」。だから、向こうの人たちは「マッカ」なんだと言う。だけど、「マッカ」って書くかと言ったら書きませんよ、絶対。「マッカ」なんて書いたら、「おまえ、どこ行ったの。」となっちまうから。

○中川　真っ赤なうそになって。

○新妻　ですから、そういう意味では、先生おっしゃったように、先、定着しちゃったほうが。だから、あれ、現地に行って「メッカ、メッカ」とわかったんですけど、「おまえ何言っているんだ。」と言うけど、メッカもわからないのか、このサイジアラビア人はと思ってたんですね。それが、彼らでいう、僕らでいえば「マッカ」に近いという。

○中川　ジョン・ケネディーなのかケネディ。

○会場　ちょっと素朴な疑問なんですけど、実験協力者の方で男女比という、男性、女性、実験に協力しましたと書いてるんですけど。男女間では、同じ母語話者の男女間では、特にエラー率とか促音が入るんだとか、そういった差は特にないのかとうことですね。

○上村　はい、なかったですね。

○会場　韓国語のとこは男性がいなかったんですね。

○上村　いなかったんです。

○会場　それは、余り意味はなく、心配ないわけですね、データ。

○上村　そうですね。たまたま初めにお願いした韓国人の女性の方が、韓国語母語話者の方が女性だったんですが、中国人の方と異なって韓国人の方は、男女関係なくネットワークを持つというのがなかったんですね。女性同士だったんですね。たまたま私がかかわった方たちがそうだっ

たのかもしれない。そういったことで、韓国語母語話者の男性の被験者を集めることが残念ながらできなかったんです。

○**会場**　きょうの結果を見ていると、余り影響はないですよね。

○**上村**　そうですね。

○**会場**　カタカナ語における長音位置を研究された。学習者にとって、日本人は考えるほどカタカナ語とか、特殊拍とか余り聞いた感じではそんなに区別しているとは思えないですが。それでも、あえてカタカナ語ってする、それを研究対象にするという理由。

○**上村**　理由ですか。それは、長音、カタカナ語の習得が難しいっていうのをいろんな文献から読んで知ったところと、カタカナ語が増加しているところとリンクしたというのと、まず、カタカナ語はどういうふうに形成されているのか見た場合、やはり促音が挿入されたり長音が挿入されたりというところで、普通の日本語よりは、促音、長音、特殊拍の比率が高いといえると思うんですね。だからこそ、難しいんじゃないかというところから、だったらその特殊拍の長音をやってみようということで、長音だとその長音符号を使うのがカタカナ語ですよね。ということで、このような研究をしたというところなんですね。

○**会場**　確かに、日本語の話語には長音とか、もともとなかった音なので、漢字語は結構長音が多いんですよね。例えば、工業高校なんていうと全部長音で、それが学習者にどんなふうに聞こえて、彼らはどんなふうに発音しているのかという。

○**上村**　例えばですね、先生がおっしゃられたように、「学校」の「校」の長音化の発音と、カタカナの長音があったときの発音というのはどういう差があるか、そういったことも調べたら、また違う結果が出る可能性はあると思います。ただ、そうですね、その長音の符号を使いたかったというところもありますし、「学校」の場合も、日本語母語話者が普通に会話してた場合は長音化して聞こえますけど、音読した場合に本当に長音化しているのか、「gakkou」と言ってしまっているかというのも、本当に調べてみないとわからないところなので。

○**中川**　確かにそうですね。

○**上村**　そういったところから、カタカナ語の長音符号を使用した、それによって、どう発音が変わっていくのかというところにフォーカスを当てて研究をすることにしました。

○**会場**　文字で書かれたものを読ませたんですね、実験では。

○**上村**　そうですね。だからこそ難しかったのかなという気もしますね。ただ、私もその留学生の方と話していて、日本語母語話者でもそれほどカタカナ語に頼ることもないですが、やっぱりカタカナ語が余り出てこない印象はありますね。

○**会場**　人によりますけど。

○**上村**　人によりますかね。なれ親しんでいるかどうかっていうところにもあると思うんですけど。そういったところから、こういう研究に関心を持ったというところでしょうか。

○**会場**　カタカナ語の習得のしにくさっていうのは確かにあって、その原因が、まず余りにも言

語と音がかけ離れているという。だから、彼らには無意味な音の連続に聞こえるためなのか。最初に教わるのが和語や漢語ばっかりなので、何となく習得がおくれるのか。

○**中川**　先生から一言やられたら。いや、「bag」ですね。ネイティブの人はどういう「bag」。これ日本語でやると「バッグ」になるわけですね。少なくともね、「バック」という場合もあるんですから。この辺は、特に英米ネイティブの方たちは、やっぱりもう「bag」で通しますか、それとも「バッグ」という発音を習得しようとしますかね。

○**上村**　日本語の「バッグ」ですかね。

○**中川**　日本語で話そうとされる方がここへ来たとき、日本に来て。

○**会場**　それはそういうふうにカタカナ語で発音しないと日本人には通じませんよという指導します。

○**中川**　しますか。「bag」ではだめだと。

○**会場**　私は。

○**上村**　多分、欧米の方であっても、日本語を話す中でしたら、いわゆるカタカナ英語じゃないですけど、そういったような発音、開音化した日本の文章にあわせて発音しているようには感じますね。

○**中川**　それは、じゃ、それは日本語であるというふうに習得して、それを実践しようとしているわけですね。なるほどな。逆に、日本の英語の発音、日本人の英語の発音っていうのは、諸外国に出て、どっかの会議で演説している政治家とかそういった人たちの発音ってわかるんだけど、いわゆる日本的な発音をしている人が圧倒的に多くて、これ、ベトナムの人とか韓国の人とかが英語話すと、ほとんど英米の、アメリカにと言ったほうがいいと思うんですが、アメリカの発音になっているんですね。これ、ちょっと話がずれるんですけど、日本はカタカナ英語が定着しているがゆえに、英語を話すときもカタカナ英語になるんでしょうかね。

○**上村**　やはりその母語の干渉の影響というのは大きいかなと感じますね。

○**中川**　というのは、これ事実かどうかご意見聞きたいんですけど、例えば、ベトナムとか韓国とかの方たちの英語は母語化した英語とは思われない。つまり、ネイティブな英語に近い発音をしているように僕は感じるんですけど、そういうことはないんですかね。

○**上村**　友人にタイ人の友人がいるんですけど、タイ人のその人によって本当にアメリカに長く、長くといいますか、留学していて、本当にアメリカ人のように発音したい、そういう気持ちがあれば近づくことはできますが、そういったネイティブの発音に近づきたいというような意識が余りなかったり低い場合には、タイ人の場合は、割とタイ語なまりの英語。

○**中川**　タイの発音に近い。

○**上村**　そうですね、はい。も聞きましたし、インド人やパキスタン、その辺の人たちも、やはりその母語の干渉が顕著にあらわれているような発音の仕方をしている印象がありますね。

○**中川**　やっぱりヒンディー語とかウルドゥー語の発音を引きずった、インドでもそうですか、

やっぱり。

○**上村**　そうですね、はい。ですので、聞きなれることによって、彼らの英語はスムーズに聞き取れることができるんですが、初対面だとちょっとやはり日本人の耳には何かなじまない音で発音しているような気がして、英語に聞こえづらいということはあると思います。

○**中川**　学生の皆さんいかがですか。何でもいいので。発音のことでも何でも。皆さんいかがですか。きょうは、本当に珍しいテーマのお話ですけれども、初めて来ていただく。いろいろとても新鮮な思いで、難しいところもありましたが、何とか半分ぐらいわかったような気になってきておりましたが。

○**会場**　ちょうど韓国から留学生いますしね、カナダからもいますし、いいお話を伺えたなというふうに思っています。ありがとうございました。

○**中川**　そうですね。それでは、もし質問がないようでしたら、きょうは本当に上村先生、本当にありがとうございました。本当に貴重なお話を伺えたと思います。こういう話は、ふだんのサロンでも伺えないような、とても内容的にも高度なものがあって、しかし一般的な広がりもある、とても有意義なお話だと思います。

それじゃ、どうも、上村先生に拍手。（拍手）

○**上村**　長い時間ありがとうございました。それから、いろいろご質問していただいて、本当にありがとうございました。

本稿は2012年度帝塚山学院大学国際理解研究所主催の第12回国際理解サロンにおける講演をまとめたものである。